

沿川の福祉・医療施設での河川空間の利用実態について

日本大学理工学部 学生会員 ○水野 雄一

日本大学理工学部 正会員 宮本 守

日本大学理工学部 正会員 吉川 勝秀

1,はじめに

河川は、都市化による開発にともない、治水・利水を目的とした整備により、親水性を失った。しかし現在は、都市部においての環境の悪化に伴い、開放的空間や生物・環境学習の場として河川が注目されるようになり、少しずつ親水性を取り戻しつつある。それらの一つとして、河川空間のバリアフリー・ユニバーサルデザイン化が計画され、すべての人にとって利用できる空間が整備されている。しかし、これらの整備された空間が実際にどのような需要のもとに、どのように利用されているか、その実態は明らかとなっていない。

そこで本研究では、首都圏における対象河川周辺の福祉施設・病院を対象とし、河川のかかわりや利用状況を把握し考察を行った。

2、調査概要

本調査では、首都圏を流れる 1 級河川の中で荒川、隅田川、多摩川、江戸川を対象に、対象河川より 500m 以内にある老人福祉施設・総合病院を選び出し、インターネット、現地調査を行い、河川空間利用方法、整備状況を調べた。さらに、電話によるヒアリング調査により、各施設の河川空間利用の実態を明らかにした。

3、対象河川周辺施設の河川利用実態

今回対象とした 4 河川周辺には、老人福祉施設・総合病院計 32 施設が確認できた。その中で、利用の有無および無回答の施設に分類した。本調査では、回答を得られなかった老人福祉施設、ヒアリング調査が困難であった総合病院を除いた老人福祉施設 24 施設を対象とし調査を行った。

(1)河川利用状況

図-1 は、対象とした老人福祉施設ごとの河川空間利用の有無を表している。隅田川は、河川全体に施設が確認でき利用も多くみられる。荒川・江戸川は、中流から下流にかけて、多くの施設を確認できるが、利用の有る施設はばらつきがみられる。多摩川は、上流から下流にかけ広範囲に施設があることが分かった。

(2)距離別利用状況

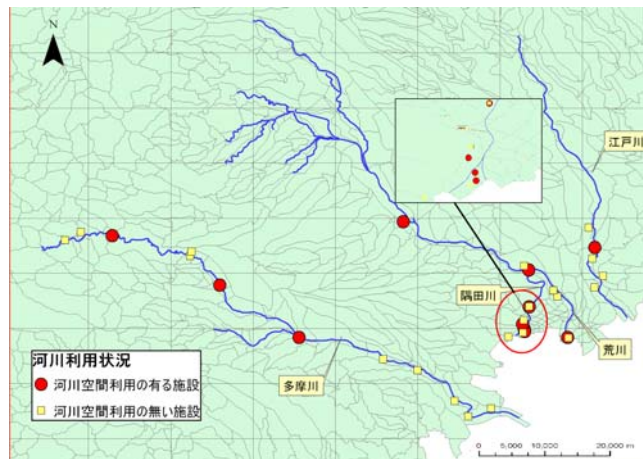


図-1 対象施設の利用別配置図

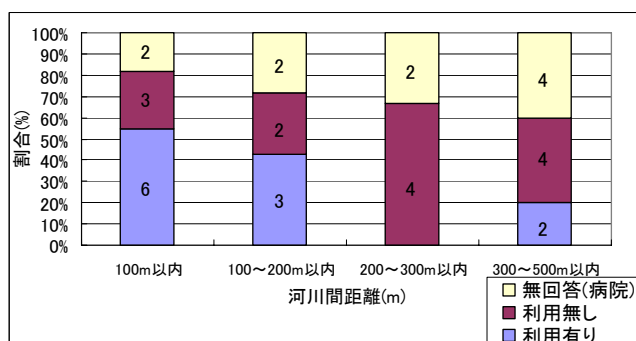


図-2 距離別にみた河川利用状況

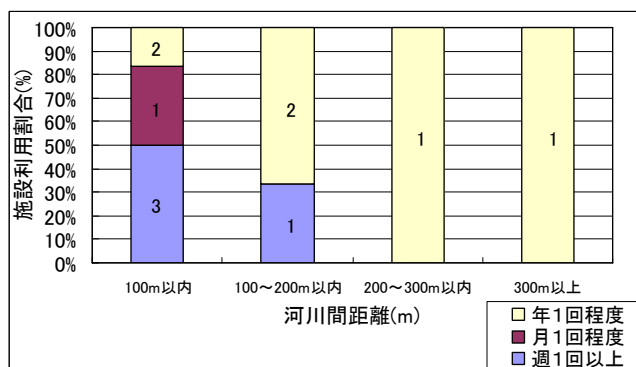


図-3 河川間距離別利用頻度

図-2 は、対象施設の河川空間利用状況を距離別に示した。河川間距離が短くなるほど利用の割合が高く、距離が延びるほど利用頻度は小さくなっている。図から、河川間距離が 200m 以内の施設は、利用割合が半数を上回っていることが分かる。

図-3 は、利用の確認できた施設を距離別の利用頻度で示したものである。頻度も割合と同様に距離に近いほど

ど高い値となった。また、200m を境に、週 1 回以上の割合が増えている。

(3)河川空間利用方法

図－4 は、利用形態別に河川空間利用方法を 1 週間に 1 回以上の利用があるものを定期的、1 週間もしくは 1 年に 1 回程度のものを不定期とし示した。全体を比較すると、利用方法として最も多かったのが散歩であった。散歩は、利用頻度も最も高く定期的に利用されていた。レクリエーションや遊覧船などの利用方法も確認できたが、行われるのは年に数回と利用頻度はあまり高くない。整備のなされている河川に近い施設や緑地の多い施設は、散歩や景観利用などで定期的に利用できるが、利用できる空間があっても距離が遠く整備のなされていない河川周辺では、イベントなど不定期に使用する施設が大半であった。

4、利用に関する考察

河川空間利用を行っている理由、行わない理由、利用頻度について、各施設にヒアリング調査・現地調査を行い表－1 に示した調査結果に関して考察した。

(1)利用理由と問題点

河川空間利用を行っている施設の主な利用理由として、下流の都市部付近の施設では、車や自転車などの交通障害がなく、道路などの景観の妨げになるものが少ない開けた空間である、車椅子で散歩をする際など、河川空間にスロープが完備されているため移動に適しているなどの理由が多く挙げられた。上流部では、河川と隣接した公園が完備された広い空間があり利用しやすいなどの意見が多く挙げられた。しかしながら福祉施設では、車椅子の利用者が多いため、階段や堤防、道路と歩道の段差が危険であるなどの改善に関する意見が挙げられた。

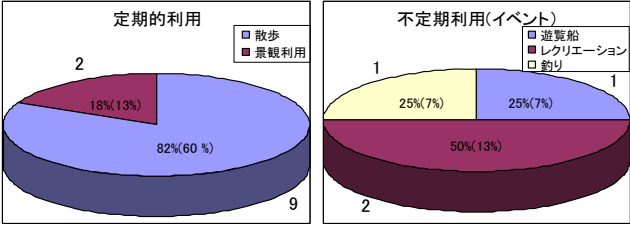
(2)利用無施設の問題点

河川空間利用を行っていない施設の理由として最も多く挙げられたのが、施設の介護体制であった。介護度の高い施設が多く、外出を認めない施設が大半であった。少数意見として、河川敷が平坦ではない、車椅子の移動の際、急坂・砂利道など舗装されておらず危険である、距離が遠く利用できないなどの理由が挙げられた。

なお、現在利用していない施設において、周辺の住民やボランティアと協力し河川空間を利用し、地域交流の場を造っていく活動がなされているところもあった。

(3)まとめ

河川までの舗装状況や河川周辺においての交通の少な



図－4 河川空間利用方法(サンプル数 15)

表－1 利用の有無に関する要因

利用有り	利用無し
・車などの交通障害が少ない ・障害物となるものがなく 景観利用に適している ・公園などの開けた空間 がある ・河川までの通路が舗装 されている	・施設の介護体制上外出 しない ・河川までの距離が遠い ・舗装が行われておらず 危険

い開けた空間の有無が利用を行うための要因として挙げられる。

河川までの移動方法として、徒歩・車椅子と車での移動の 2 種類に分けられる。岡¹⁾によると、一般的に人が苦なく歩ける距離は、気温や天候によって変化するが、約 400m 前後であると考えられている。図－3、図－4 から、最も頻繁に利用されている散歩が、200m を境として行われており、200m より離れている施設では利用が確認できなかった。以上のことをふまえ、車椅子を利用した移動の際、苦なく移動できる距離は約 200m 前後であると推測される。

5、結語

- (1)河川に隣接している老人福祉施設は、河川ごとに立地する位置に大きな違いがみられたが、多摩川をのぞく整備の進んだ対象 3 河川では、下流など都市部近くに集中していることが分かった。
- (2)老人福祉施設での河川空間利用有無の要因として、河川からの距離があり、200m を境に利用状況・頻度状況が低下している。
- (3)河川空間を利用する目的として、利用に関する分析から、周囲の交通障害、河川隣接公園の有無などが関係していることが分かった。

参考文献

1)岡 並木：舗装と下水道の文化、論創社、1985
2)吉川 勝秀：川のユニバーサルデザイン、山海堂、2005